

# カテゴリー分類が引き起こす認識の変化

- 英語の色彩語彙 *yellow* の場合 -

山 田 仁 子

## Perceptual Change from Categorization - A Case Study of English Color Term "Yellow" -

Hitoko YAMADA

### Abstract

Colors of things can change in human minds. Sandy color of bricks or yellowish white of the midday sun often turns into vivid yellow, when painted from memory. This study shows that this kind of perceptual change of color is caused by categorization.

English color category of 'yellow' consists of various shades of color, from the prototypical 'yellow' of 'lemon' to the peripheral 'yellow' of 'bricks' or the 'midday sun.' But once the color of 'bricks' or the 'midday sun' is called 'yellow,' i.e. categorized as a member of the color category 'yellow,' this color begins to get closer to the prototypical member of this category, i.e. vivid yellow, in human minds.

The change of perception can be a systematic process that happens with categories in general. This study provides a key to clarify the dynamic construction of categories.

## 序

本研究では、カテゴリ分類することが、その後の事物の認識に影響し、認識の仕方を変化させる可能性について論じる。

今回具体的な事例として取り上げるのは、Berlin & Kay が英語の基本色彩語彙の一つとする ‘yellow’ という色カテゴリである。まず第1章では、色彩語彙 ‘yellow’ が言語使用において実際に指し示す色彩の範囲について、過去の研究や言語使用場面で確認する。‘yellow’ という色彩語彙が、実際の言語使用においては、かなり広い範囲に渡る色彩を表すことが明らかになる。次に第2章で、この広い指示範囲を持つ ‘yellow’ という色彩語彙によりその色を表された物が、その後言語使用者の認識において、焦点色に近い色を持つ物へと変化する事を示す。ある色カテゴリにおいて、周遍的にかろうじて含まれた色であっても、いったんその色カテゴリの成員となってしまうと、その色を備える物が、色カテゴリのプロトタイプ、つまり焦点色に近い色を持つ物として認識されるようになるのである。結論として、現実の事物を目前にした認識に基づく判断でカテゴリ分類されたはずの物が、カテゴリ分類されることで、異なる認識のされ方をするようになることを明らかにする。

本稿で扱うのは ‘yellow’ という色カテゴリに関する現象のみだが、カテゴリ分類に伴って起きるカテゴリ成員の認識の変化は、色カテゴリのみならず、カテゴリ全般についても起きると予想される。今回色カテゴリにおいて確認された現象は、カテゴリ一般の性質を解く鍵になるであろう。

カテゴリ化が色の認知に影響を与える可能性については、Kay & Kempton, Kay & Regier, Tan et al. が、実験等により考察しており、また、認知の仕方によりカテゴリがその大きさを変える事については、MacLaury (1995, 1997) が、複数言語の色彩語彙を比較する調査により論じているが、本論では、コーパスを中心とした言語資料や、写真や絵といった画像資料を用いて、認知とカテゴリの相互作用について考察を進める。

## 1. 色彩語彙 ‘yellow’ の指示範囲

英語の ‘yellow’ という色彩語彙は、広い範囲の色彩に当てはめて用いられる。次の図1は、MacLaury (1995) が、マンセルの色彩体系を元に、英語色彩語彙の焦点色(foci)と指示範囲をまとめたものであるが、‘yellow’ も含めどの色も焦点色からかなり離れた色まで表せることが分かる。

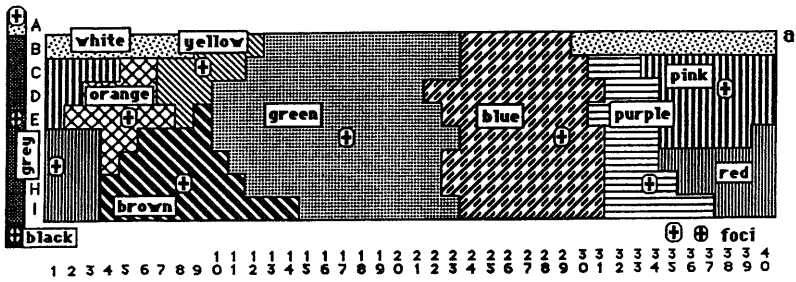


図1 英語色彩語彙の焦点と指示範囲 (MacLaury 1995)

次に、BNC コーパスとインターネットのグーグル画像検索により、‘yellow’ という色彩語彙が、実際の言語使用の場において、いかに用いられているのか、どのような色を表せるのかについて調べる。

まず、BNC から収集した次の例では、色彩語彙 ‘yellow’ が、焦点色に近い色を指すと判断される。焦点色は、異なる言語間でもかなり重なるものであることが、Berlin & Kay により指摘されているが、この英語色彩語彙 ‘yellow’ の焦点色も、日本語の色彩語彙「黄色」の焦点色とほぼ一致する。以下の(1)(2)(3)のようなコンテキストでは、日本語の「黄色」も同様に用いられるが、この事実はこれらの例で示される色が焦点色であるならば当然のことと言える。

- (1) ‘My favourite colour is **yellow**’<sup>1</sup>
- (2) Susan saw a smear of **yellow** paint across his knuckles.
- (3) **yellow** rind of lemons

上の3つの例は、どれも色彩語彙 ‘yellow’ の焦点色を表しはするが、焦点色を表すことになっている条件と理由は、それぞれに異なる。

(1)は色そのものについて語るコンテキストであることが、焦点色を表す理由となっている。話者は、色そのものをあれこれ思い浮かべ比較した上で自分の好みの色を語っている。このように、何らかの物が備える性質としての色を語るのではなく、色そのものについて語るコンテキストでは、色彩語彙は焦点色を指す。

(2)は、色そのものというよりは、ペンキという物が備える性質としての色を表してはいるが、ペンキや絵の具の色は、焦点色に対応することが求められる

<sup>1</sup> 本稿において問題とする色彩語彙は、太字で示している。

特殊な物である。物の色と焦点色が対応することが求められるコンテキストというのも、色彩語彙が焦点色を表す条件となる。

(3)も色そのものについて語っているわけではなく、レモンという物が備える性質としての色について語っている。(2)と異なる点は、レモンがペンキや絵の具のように、焦点色との対応を求められる種類の物ではないということだ。この例の場合には、たまたまレモンという物が備える性質としての色が、色彩語彙 ‘yellow’ の焦点色に近いために、レモンを表すために用いられた ‘yellow’ が焦点色を表すことになったのである。

物が備える性質としての色を語る場合、色彩語彙は物との組み合わせを含むコンテキストにより、焦点色に限らない広範囲な色を表すことができる。‘yellow’ という色彩語彙も、この「色」という性質を備えるとして組み合わせられる物によって、焦点色から、焦点色より随分とかけ離れた色まで、かなり広範囲に様々な色を表す。<sup>2</sup>

以下に挙げる BNC コーパスからの例では、(2)や(3)の例とは異なり、焦点色から遠く離れた色を表している。

- (4) ‘government furniture of polished **yellow wood**’<sup>3</sup>
- (5) blue skies with fluffy white clouds, warm **yellow sunshine**, blue seas and **yellow sands**
- (6) the ancient **yellow stone**
- (7) **yellow clay**
- (8) **yellow soil**
- (9) London-Brighton line under the South Downs, is a castellated portal of **yellow brick**, characteristic of the flamboyant design of the Victorian railway mania ...
- (10) the other squat and block-like faculty buildings of **sandy yellow brick**,
- (11) a tube, had been tunnelled out through the green and **yellow clay** (incidentally providing materials for millions of **bricks**),

<sup>2</sup> 英語の ‘orange’ フランス語の ‘jaune’ (日本語の「黄色」に最もよく対応する色彩語彙)が、幅広い色帯を指すのに用いられる事実は、鈴木 (1990) により指摘されている。

<sup>3</sup> この例文より以降は、色彩語彙が描写する物を中心に、議論において重要な意味を持つ語彙については、下線を付して示すことにする。

(12) The big **yellow dog** sighed softly to himself ...

(13) She and Bill went to see a litter of pale, **yellow puppies** ...

(14) **yellow labrador**

(15) a large **yellow hedgehog**

(4)は、家具の木材の色を表し、日本語ならば薄茶と表現するような色を表す。グーグルの画像検索でも、“yellow wood”というキーワードで検索すると、黄葉した並木の写真と共に、樫や松の木材や、こうした木を使った薄茶色の家具の画像が並ぶ。黄葉した並木に対して用いられる‘yellow’は、色彩語彙‘yellow’の焦点色に近い色を表すが、木材に対して用いられる‘yellow’は、焦点色とはかなりかけ離れたものとなる。

(5)は自然の風景の色を語った文だが、そこで、太陽の光と海岸の砂が‘yellow’で表されている。これも、‘yellow’の焦点色とは考えられない。昼の太陽の光は色を備えているとも言いがたいほどの色であるし、砂の色は日本語なら薄茶かベージュと表現するような色であると思われる。(6)(7)(8)の‘stone’ ‘clay’ ‘soil’に結びつく‘yellow’も、(5)と同様の色を表す。‘yellow clay’などのフレーズでグーグル画像検索すると、色味に程度の差はあるが、‘yellow’の焦点色から遠い色を表す画像が現れる。

(9)のレンガ(‘brick’)に対して‘yellow’が表す色は、やはり日本語ならば薄茶やベージュと表現するような色である。(10)で‘yellow brick’が‘sandy’と形容されるように、(5)にも挙げた、海岸の砂によく見られるベージュ色を表している。また、(11)にも述べられるように、レンガが土から作られることを考えれば、(7)のように‘yellow’と描写された土から作られるレンガも‘yellow brick’と描写されることは当然と言える。

(12)や(13)では、犬が‘yellow’と描写されている。日本語では「黄色い犬」という表現を聞く事はあまりない。この場合も、‘yellow’は薄茶か明るい茶色を表す。(14)ではラブラドルという種の犬を‘yellow’が形容しているが、ラブラドルの色は、これも砂によく見られるような薄茶か、もう少し濃く明るい茶色をしている。

(15)で‘yellow’と描写されるのは、はりねずみだが、この動物の色はラブラドルよりも濃い色をしている。色彩語彙‘yellow’の焦点色からはほど遠い色と言えるだろう。

犬もはりねずみも、英語では‘yellow’と描写されることが多い事が明らかになったわけだが、英語においては、他にも猫や熊など多くの動物がその毛色

を ‘yellow’ と描写される。これもグーグルの画像検索にあったのだが、日本語ならば焦げ茶と表すような熊の写真に対して、‘brownish-yellow’ と表現されていた。熊の色が茶色に近い事を認めながらも、基本は ‘yellow’ との認識なのである。

以上の考察により、‘yellow’ という色彩語彙が、実際の言語使用においては、かなり広い範囲に渡る色彩を表すことが明らかとなった。

## 2. 色カテゴリー分類による、物の色の認識の変化

色彩語彙が、広い指示範囲を持つということは、見方を変えれば、幅広く異なる色彩を、同一の色彩語彙でまとめて示すということを意味する。実際には様々な色合いであっても、同一の語彙で表されるとなると、そこに異なる色を焦点色へと集約しようとする力が、人の認識の段階で働くと思われる。

前章で ‘yellow’ の焦点色とはかなり異なる色を表す例として、‘yellow sunshine’ ‘yellow brick’ ‘yellow dog’ を挙げたが、実は、こうした表現における色彩語彙が、焦点色を示す場合も多く見られる。グーグルの画像検索を用いて、‘yellow sunshine’ ‘yellow brick’ ‘yellow dog’ というフレーズで検索すると、「写真コンテンツ」の範囲では焦点色と異なる色彩が並ぶのに対して、「クリップアート」というコンテンツタイプで検索すると、焦点色にほぼ一致する色彩が大量に見られる。黄色の光を放つ黄色い太陽、ペンキか絵の具を塗ったかのような黄色を帯びたレンガ、全身レモン色の犬の絵が、ずらりと並ぶのである。もっとも、写実的に描かれた絵は、まだ現実の微妙な色を忠実にうつそうとしているが、イラスト的に描かれた絵は、圧倒的に焦点色を備えた物が多い。

英語圏の絵本に描かれる太陽や、レンガの家や道、犬や熊も、‘yellow’ の焦点色である鮮やかな黄色で描かれる事が多い。

“*The Wonderful Wizard of Oz*” (『オズの魔法使い』) で Dorothy たちがたどる ‘yellow brick road’ は、絵本によって、その色が異なる。G. Hildebrandt が描く道は、レンガの質感も感じられるほど写実的に描かれており、その色は現実世界でもよく目にするような薄茶色をしている。R. Sabuda の飛び出す絵本ではより抽象化された絵となり、道の色は輝く金色、つまり鮮やかな黄色で描かれている。また E. Fernandez によるコミック化された絵では、道は ‘yellow’ の焦点色により近い色で描かれる。更に、“*The Wonderful Wizard of Oz*” の ‘yellow brick road’ を象徴的に使っていると考えられる、I. Beck が描いた Elton John のアルバム “*Goodbye Yellow Brick Road*” のジャケットデ

ザインには、‘yellow brick road’が‘yellow’の焦点色にかなり一致する色で大きく描かれている。

Eric Hill の、“*Spot Goes to the Park*”など一連の絵本に出てくる子犬 Spot は、本によっては少し褐色がかかる絵もあるが、多くは‘yellow’の焦点色に近い色をしている。E. H. Shepard が描いた熊(のぬいぐるみ)“*Winnie-the-Pooh*”は、実際の熊に見られる色よりも黄色味を増しているが、ディズニーでアニメ化されてからは、更に‘yellow’の焦点色に近づき、日本語でも「黄色」と迷わずに表現できるような鮮やかな黄色になっている。

太陽も、砂色のレンガも、ラブラドールのような犬も、熊も、はじめに現実の物とそれが備える色が認識される段階では、‘yellow’という色カテゴリーの中でも周辺の成員の色が、その物が備える色として認識されたはずである。ところが、いったん‘yellow’の色カテゴリーに含まれることが確認され、‘yellow sunshine’ ‘yellow brick’ ‘yellow dog’ ‘yellow bear’といった表現が成立すると、同じ物の色であるにもかかわらず、その色は‘yellow’カテゴリーの周辺色から焦点色へと、認識される色が変化し始める。色カテゴリー分類により、物の色の認識に変化が引き起こされていると考えられるのである。

#### 結語 カテゴリー分類が引き起こす認識の変化

本稿で明らかになった、色カテゴリー分類が色の認識に変化を引き起こすという事実は、カテゴリー分類、カテゴリー化一般においても、同様の認識の変化を引き起こしているのではないかという仮説を生む。1つの事象がカテゴリー分類される際、仮に周辺のものではあっても1つのカテゴリーに含まれると判断されると、この同一の事象がその後、カテゴリーの中心的なメンバーとして認識されるように変化すると、予想されるのである。

この仮説については、今後更に多くの事例の分析を積み重ねることで、確認していく必要があるだろう。

#### 参考文献

- Berlin, B. & Kay, P. (1969) *Basic Color Terms - Their Universality and Evolution-*, University of California Press
- Elton John (1973) *Goodbye Yellow Brick Road*, DJM Records, with Outside Cover Illustration by Ian Beck

- Fernandez, E. (2006) *The Wonderful Wizard of OZ*, Image Comics, Inc.
- Hildebrandt, G. (2003) *The Wonderful Wizard of OZ*, Courage Books
- Hill, E. (2005) *Spot Goes to the Park*, Warne
- Kay, P. & Kempton, W. (1983) "What is the Sapir-Whorf hypothesis?", *The Berkeley Cognitive Science Report Series*
- Kay, P. & Regier, T. (2006) "Language, thought, and color: recent developments", *TRENDS in Cognitive Sciences Vol.10 No.2*
- 国広哲弥 (1970) 『意味の諸相』 三省堂
- MacLaury, R.E. (1995) "Vantage theory", In Taylor, J.R. and MacLaury, R.E. (eds.) *Language and the Cognitive Construal of the World*, Walter de Gruyter & Co.
- MacLaury, R.E. (1997) "Skewing and darkening: dynamics of the cool category", In Hardin, C.L. & Maffi, L. (eds.) *Color Categories in Thought and Language*, Cambridge University Press. pp.261-282.
- Milne, A.A. & Shepard, E.J. (1926) *Winnie-the-Pooh*, Methuen & Co. Ltd / Published with the original colour illustrations in 2004, Egmont UK Ltd
- Sabuda, R. (2000) *The Wonderful Wizard of OZ*, Little Simon
- 佐竹昭廣 (1955) 「古代日本語に於ける色名の性格」『国語国文』24 卷 6 号
- 柴田武 (1988) 「色名の語彙システム」, 『日本語学』vol. 17-1
- Stanlaw, J. (1997) "Two observations on culture contact and the Japanese color nomenclature system", In Hardin, C.L. & Maffi, L. (eds.) *Color Categories in Thought and Language*, Cambridge University Press. pp.240-260.
- 鈴木孝夫 (1972) 「色彩語の意味分析に関する一考察」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』 第 4 号
- 鈴木孝夫 (1987) 「Vert と Jaune の文化意味論的考察」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』 第 19 号
- 鈴木孝夫 (1990) 『日本語と外国語』 岩波書店
- Tan, L.H., Chan, A.H.D., Kay, P., Khong, P.-L., Yip, L.K.C. & Luke, K.-K. (2008) Language affects patterns of brain activation associated with perceptual decision", *PNAS Vol.105 No.10*
- 吉村耕治 (2005) 「現代英語の基本色名の語源と意味-日英比較表現論の視点から-」